

P-045

S-310-44号機による Sq電流系付近のプラズマ特異現象の観測

1石坂圭吾, 2阿部琢美, 3熊本篤志,
4田中真, 5吉川顕正, 5松下拓輝, 1中村龍一郎,
1富山県立大, 2ISAS/JAXA, 3東北大, 4東海大, 5九州大

第18回宇宙科学シンポジウム, 2018. 1. 9 - 10

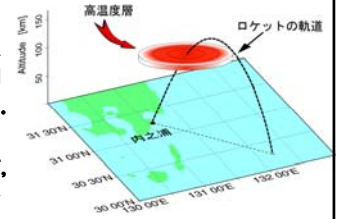
目的と実験概要

【実験目的】

電離圏下部に時折発生するプラズマの高温度層の発生メカニズムを解明すること

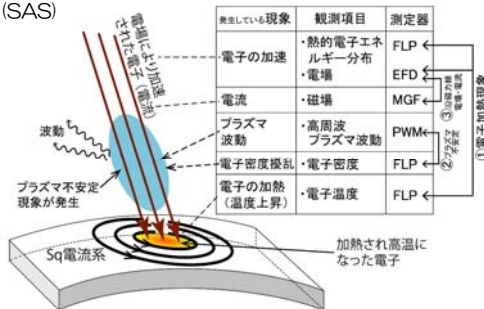
【実験概要】

プラズマの高温度層はSq電流系と呼ばれる渦電流の中心付近に発生し、電場が温度上昇に重要な役割を果たすという考えが有力である。5種類の観測機器を搭載したロケットを高温度層に向けて打上げ、現象解明のための鍵となる観測を実行する。

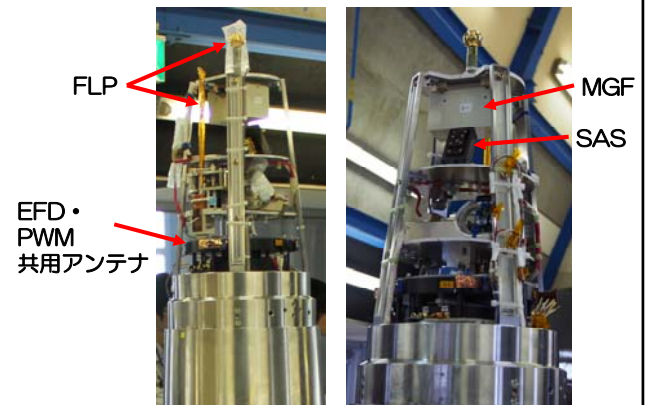


搭載観測機器

- 電子エネルギー分布・電子密度擾乱測定器 (FLP)
- 電場観測装置 (EFD)
- プラズマ波動計測器 (PWM)
- 磁力計 (MGF)
- 太陽センサー (SAS)

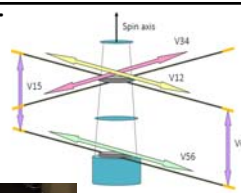


搭載観測機器

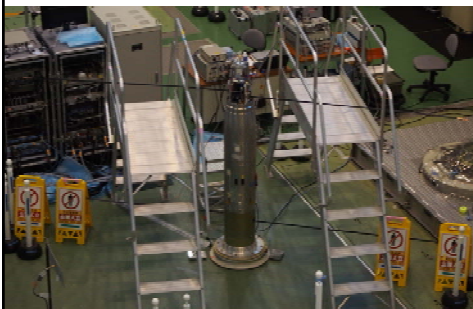


EFD & PWMアンテナ

4m tip-to-tip
先端10cmがDC電場測定用電極
PI部: 2対, Sub-PI部: 1対
PI部-Sub-PI部間隔: 1.5m



アンテナ配置図



打ち上げの条件

本実験ではSq電流系中心に生じる現象の観測を行なうが、その位置は南北・東西方向に移動するため、**ロケットの予測軌道にあることを見極めて打上げ**を行なう必要がある。

実際には**地上で磁場をモニターしてSq電流系の位置を推定**し打ち上げ判断を行なう（九州大学の担当）。

但し、地磁気活動度が活発な場合にはSq電流以外の電流成分が卓越するために渦電流の分布を推定することが困難である。

したがって、本実験で狙う現象に関する条件としては

- 1) 地磁気活動が比較的静穏でSq電流系の位置推定が可能
- 2) Sq電流系の中心がロケットが通過する予測軌道上にある

の2つである。

ロケット打ち上げ

2016年1月15日 12:00 LT
発射上下角：75.5°
Apex：161km (X+198sec)

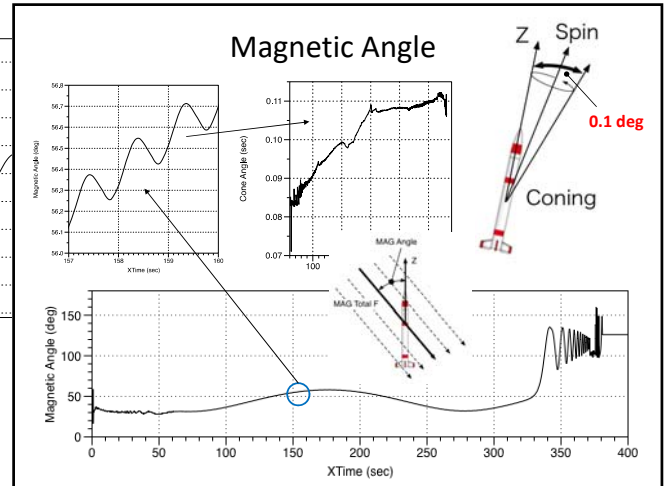
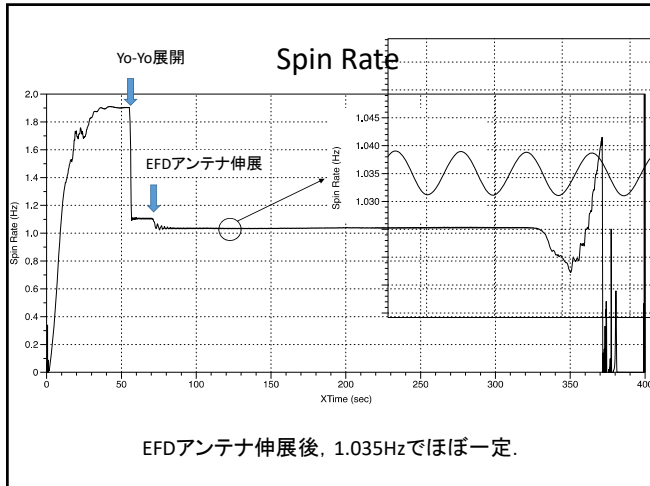
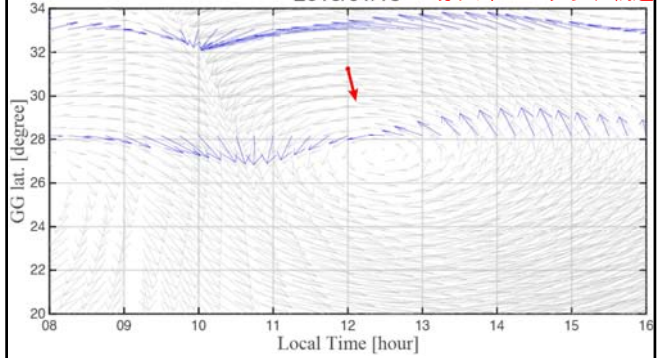
科学観測機器は
正常に動作



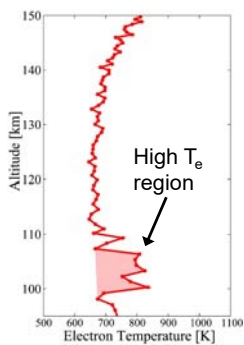
地上での磁場モニタ

ロケットはSq電流系付近を飛翔

2016/01/15 赤矢印：ロケット軌道

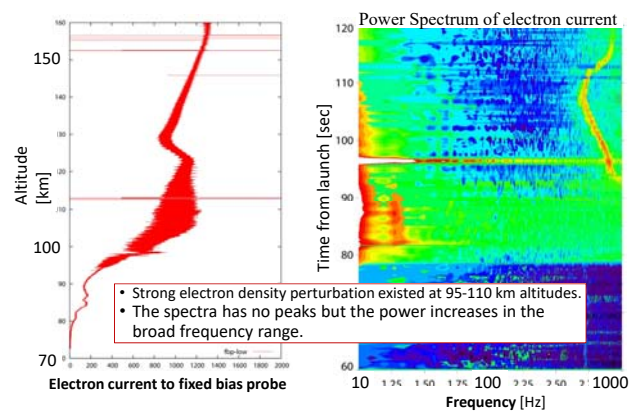


FLP Result 1: Electron temperature



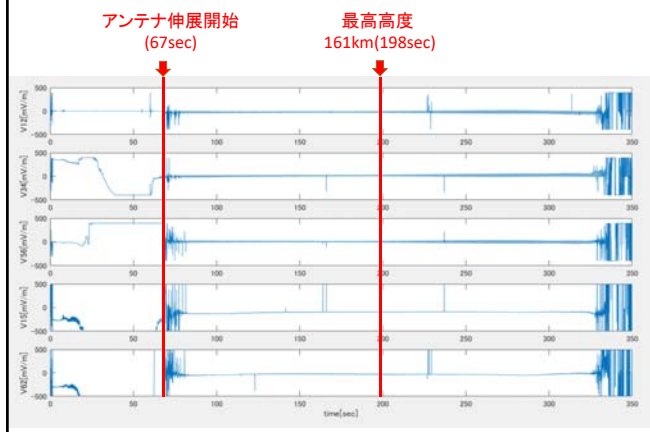
- At 100-110 km altitude, T_e was about 150 K larger than the background. This suggests an existence of electron heating region in the Sq current focus.
- Usual equation to estimate T_e was unavailable because of strong electron density perturbation at 95-110 km altitudes, and therefore a new method was adopted.
- Non-thermal component may exist in the electron heating region.

Result 2: Electron density perturbation

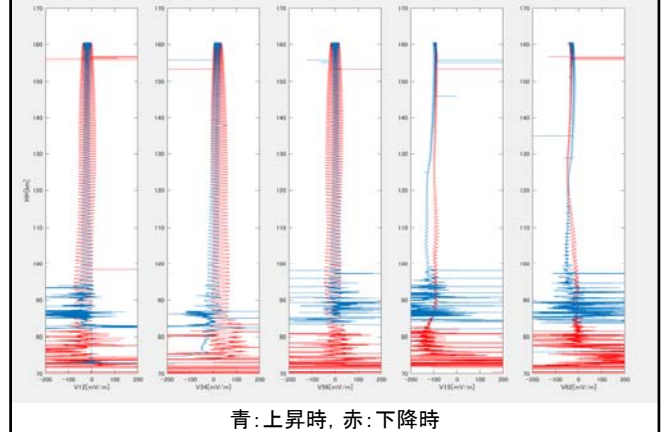


- Strong electron density perturbation existed at 95-110 km altitudes.
- The spectra has no peaks but the power increases in the broad frequency range.

EFD: DC Electric field

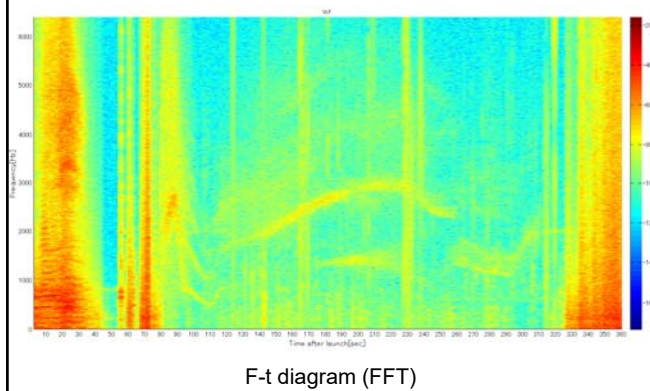


EFD: DC Electric field

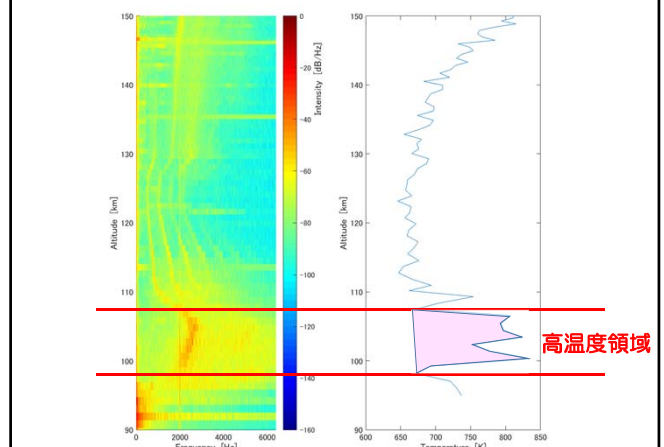


EFD: AC Electric field(VLF)

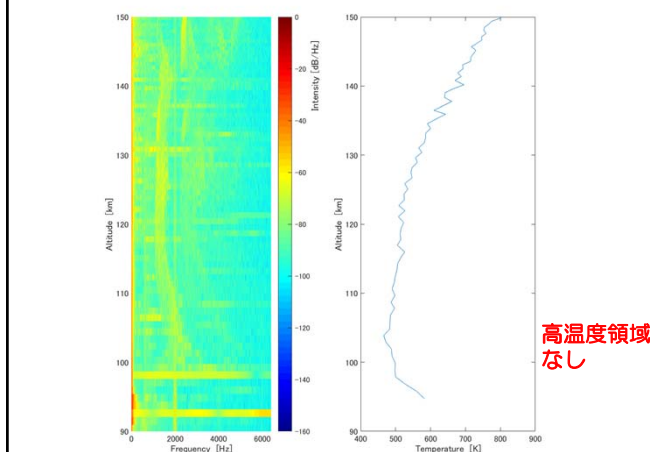
12.8kHz sample waveform



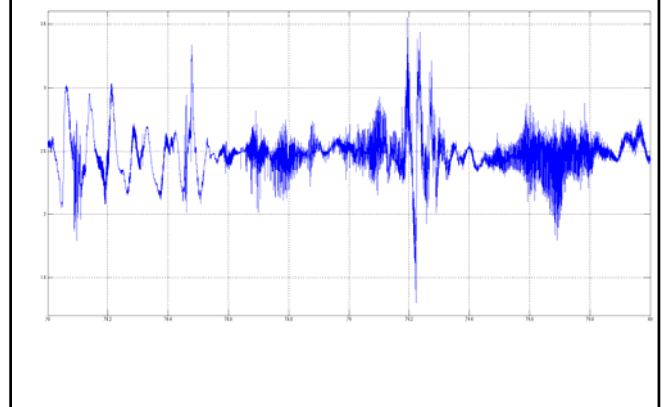
EFD AC成分(VLF)とFLP 電子温度との比較(ロケット上昇時)



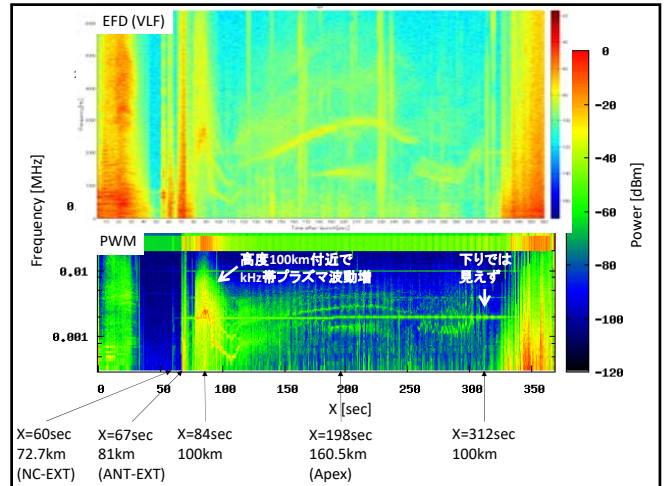
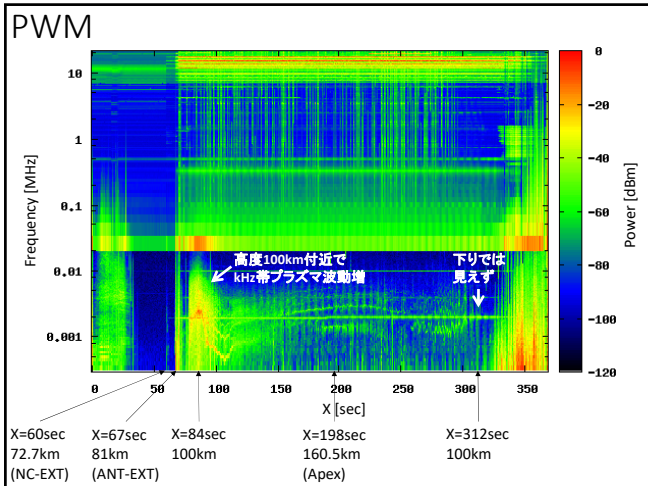
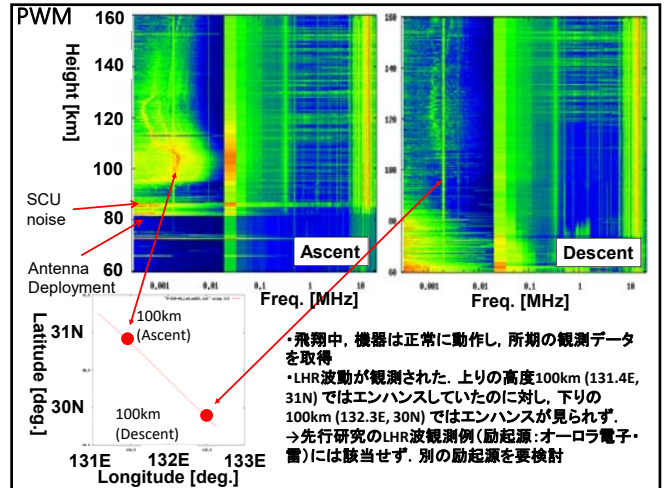
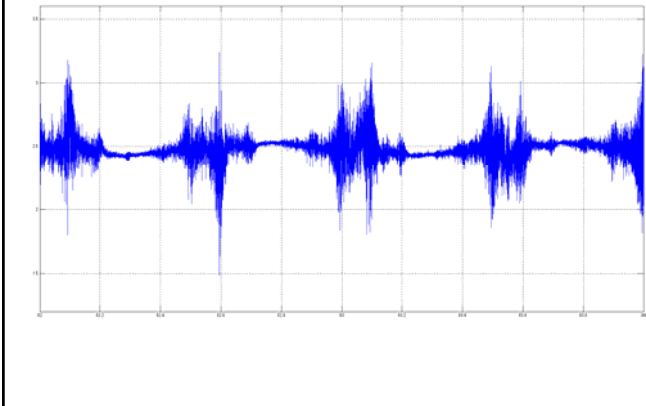
EFD AC成分(VLF)とFLP 電子温度との比較(ロケット下降時)



VLF波形: 78 ~ 80 sec (94km ~ 97km)



VLF波形：82～84 sec (98km～101km)



まとめ

S-310-44号機は、Sq電流系の付近を飛翔
 搭載された科学観測機器は全て正常に動作

高度100km～110kmの間に高温度領域が存在

Sq電流系中の電子加熱を示唆

- DC電場 ← ロケットの姿勢決定後実施
- プラズマ波動の解析
- ロケット上昇時、下降時の違い

電離圏プラズマ中の高温度層の発生メカニズムの解明